

## II 6. 山麓畑作地域（村山・杉田・山宮）

火山性扇状地，富士及び古富士原面に展開される有畜農業と蔬菜農業。  
耕地広く専業多い。商業的農業。

## III a. 古富士丘陵水田地域（白糸・上野・柚野）

火山性氾濫原と荒川沿岸段丘。芝川本流からの灌漑。米作は60~85%  
麦，甘藷，落花生を加えた組合せ。

## III 6. 古富士丘陵田畑地域（芝富・安居山・屋山）

古富士丘陵を屋山丘陵（古富士火山原面）は耕地平均45反で自給用  
農業。第二種兼業は50%を示す。

最後に本地域の農業の地域性であるが，他地域と具体的に比較するには条件が不十分のような地域ばかりだったので，本地域の特徴的な点を抽出してみる。

①水，気候に恵まれているが，新しい火山地域なので，火山灰土壌特にマサの問題があり，畑作に障害がある。

②標高の低い地域であるから（火山麓としては），交通（鉄道・道路）の便がよい。工業・商業の発展性があり，市場も近い。

③古く開発されたので耕地化が進み，作物も多種で，集約的農業である。

④小規模経営なので兼業農家が多く，自給農業である。特産物といえるものなし。

⑤酪農業は取入れられているが，専業ではほんのわずかで，養鶏，養豚等が積極的に行なわれている。

結論的に云えば，火山地域の農業としての性格は，水利・土壌等の自然条件の中に見られるが，開発初期には影響の大きかったこれら自然条件は，現在では農業経営に決定的な条件ではない。地お総市周辺地域としての性格が，兼業や蔬菜・酪農業に現われているといえよう。

## 高冷地農業の地理的考察

—長野県南佐久郡野辺山原の場合—

山中正子

長野県の八ヶ岳山麓に位置する野辺山原は，標高1,300mから1,300mにかけて，林野と畑作地の広がる超高冷地域である。

当地域を調査した究極の目的は，野辺山開拓集落を中心にした野辺山原の“特殊性”——地域性と言いたいところである。しかし，地域性というには余りにも調査範囲のスケールが小さ過ぎる。従って，調査終了後は“特殊性”

という呼び方をしている — を把握することにある。この目的に対する解答は、具体的には火山山麓の高冷地という自然環境の下で、一開拓地から有数の高冷地野菜の主産地へと発展した野辺山開拓の歴史に負うところが多い。

野辺山原一帯の気象を概観すると、年平均気温は7.5°Cで札幌の7.2°Cにほぼ等しい。無霜期間は短かく、冬期の地表凍結が激しいので、年間の農業労働は夏期の野菜栽培に集中的についやされている。

地形的には、野辺山原の大部分は主として古ハケ岳火山噴出物から成る火山性扇状地である。(地形面としては野辺山原面と名付けた。)野辺山原面は、所々に熔岩を混え、数条の放射状侵蝕谷で刻まれている緩斜面である。構成物質を切って礫層がのり、その上にロームの見られる所が多い。又、局部的には、粘土、シルト・砂から成る湖成層も見られる。同原面上は、主として天然のきょう木を混えた原野と人工の落葉松林、及び畑作地としての利用がされている。いわゆる野辺山台地といわれる野辺山原でも高所にあたる部分は、稲作は不可能であるが、野辺山原面の東縁にあたる千曲川の谷底平野ならびに同原面を刻む谷の下流では標高1,200m位まで水田が見られる。野辺山原周辺の他の地形面としては、ハケ岳火山錐、第三紀層安山岩の山地松原湖辺りに泥流地形が認められる。

野辺山原面は5°~10°という緩傾斜地で、夏期に野菜(白菜、かんらん、レタス)、牧草、馬れい薯などの畑作物が作付けされる。

斜面上をおくろ土壤は、軽い壤土質の火山灰土壤で、冬の乾燥には着るしい風蝕を受ける。土壤侵蝕と共に強酸性でりん酸欠乏の甚だしい当地域の土壌は、牧草と輪作体系を確立することによって改良がはかられている。

当地域の人文的な側面としては、野辺山原上の農業開拓集落・野辺山開拓を集中的に報告することによってかえた。

野辺山開拓は、第2次大戦後に食糧増産と外地からの引揚者の帰農をはかる緊急開拓によって本格的な農業開拓が行われた。開拓当初から現在にいたるまで、農業経営形態上では自給的穀作→園郊式野菜栽培→酪農経営をミックスした野菜栽培という変化を経て現在にいたっている。この変化が、土地利用にあらわれた点としては、開拓当初の作付がもっぱら大豆、大小麦、あわなどであったのが、昭和25年頃からは白菜・かんらんの作付けが始まった。土地利用にあらわれた作付作物の種類の変化は、一方では野辺山開拓地内部において自給的穀作経営に行きづまりが生じた結果、開拓協同組合の営農方針の指導が行われたからであるが、他方この変化をもたらしした要因は、当時の日本の農業—ひいては、日本の消費経済全体—が、食糧増産という目

的から離れて農業経営の構造自体が変化し、それに伴って食生活の変化を来したことも大きく影響している。蔬菜単一栽培に酪農を経営内部にとり入れたのも、同様に外部からの影響と内部的な変化がマッチした時に起った。酪農をとり入れた結果としては、土地利用上に牧草（チモシー、レッドクローバー、オーチャードグラス）の作付があらわれている。

酪農は一般的に農業経営の中で果す役割は、酪農專業を除いてはかなり補助的であるが、当地域のように水田経営が困難である場合には、農業経営の根幹となっている。

当地域の現状は、いまだに蔬菜が経営の中心となっているが、酪農をとり入れた混合農業は将来の方向を指示しているといえる。即ち、農業収入が一時的、投機的なものからなり定期的になる。農業労働についても、年内の労働力の配分が計画性をおび有効に使われる。牧草を作付けることによって、農業技術上の難点であった土壌の改良も見通しが明るくなる。

しかし、もちろん明るい見通しばかりではない。統計から、現存の農家（約90戸程）の中に、無所得農家が出ている年がある。この一例ばかりでなく今後に残される問題は多いが、とてい未熟な力では追求が困難であった。

## 高冷地農業の地理的考察

— 八ヶ岳西麓 —

矢 口 和 代

### 1. フィールド選択にあたって

地域の選択につきまづ考慮したのは、自然条件の過酷な所である。何故ならば土地に於て人間、自然相互の作用によって創出される地域性を把握するためには、厳しい自然条件とそれに対応する人間作用とが、非常に明白に現われる所と考えたからである。

科学の進歩と共に自然条件の絶対性、重要性には変化が見られるが、人文現象に可能性を与えるという点に於て、依然重要な因子であると考えられし、又第一次産業特に農業の面での重要性は、現在に於ても自然が *base* となっていると認められる。

厳しい自然条件のもたらす制約と人間活動のそれに対する適応、克服を八ヶ岳西麓高冷地農業にみた。

高冷地とは、低暖地に対する語であり、ある高度をもつ低温気象性の土地で高さという地形的要素と、それに伴う低温という気象性要素とが、自然的立地要因を決定している。